

『 症例に学ぶ - 患者さんが先生 - 』

医療センター 古賀 義則

肥大型心筋症 (HCM) は1960年代に漸く臨床的に認識される様になった比較的新しい疾患である。久留米大学第3内科では日本で第1例目のHCMを発見して以来、恩師戸嶋裕徳名誉教授をリーダーとして本症の臨床的、基礎的研究が精力的に行われた。その手伝いをしながら学んだ点を述べてみるが、何かの参考になれば幸いである。

HCMは今では著明な心室中隔肥厚、流出路狭窄から拡張型心筋症 (DCM) 様病態まで多彩な病像を示す病気として知られているが、この様な病態の多様性のために発見初期には1例1例が各々異なった病像を示す奇妙な病気であったに違いない。戸嶋名誉教授の口ぐせは「患者さんが先生である」で、1人1人の患者の鋭い観察がその病気の本質に迫る洞察力を生むことを示された教訓であるが、これは先生のHCMの経験から生まれたと推測している。例えば小生が入局して間もない頃先生があるHCM例の解剖に立会われ、血管がボロボロであったと興奮して話されたことを今でも鮮明に憶えている。確か40歳代の女性で冠動脈の動脈硬化は考えにくく、HCMの本質的な病変であると洞察されたに違いない。この症例がヒントとなり、その後3内科ではHCMの心筋虚血について世界をリードする研究が展開され、今では冠小動脈病変は心筋肥大と共にHCMの主要な病変であることが明らかにされた。

一方HCMは20-30mmに及ぶ著明な左室壁の肥

厚が特徴であるが、最後には収縮力の低下、心筋の菲薄化と左室拡張を来しDCM様病態に陥ることが最近明らかとなり、拡張相HCMと呼ばれている。このリモデリングと呼ばれる驚くべき病態変化を示すことを教えてくれたのも1人の患者さんであった。この症例は日本で2番目にHCMと診断された方で、20年以上経過した頃から急速に拡張相HCMに進行したが、それまでは正常の2-3倍にも肥厚した心筋が逆に菲薄化することは想像さえしていなかった。この方は70歳で難治性心不全で他界されたが、HCMの様な慢性疾患はとて5年生存率などで議論できる病気ではなく20-30年以上の自然歴をみなければその病気の全体像は把握できないことを教えてくれた。確かにEBMが叫ばれる様に科学的な証明には多数の症例が必要であるが、1人1人の患者さんが示す各々の病態は全て真実であり、この中に新しい研究や治療法の開発のヒントが隠されていることを忘れてはならない。

最近の分子遺伝学の進歩によりHCMでも続々と主に収縮蛋白をコードする遺伝子の突然変異が病因として同定されている。その主なものは心筋βミオシン重鎖、心筋トロポニンT、心筋ミオシン結合蛋白Cの遺伝子変異で、逆にアクチンやトロポニンCの突然変異は殆ど発見されていない。これは恐らくアクチンの様な直接収縮に関与する分子の変異は致命的となり病気として発現しえず、一方病気の原因となる遺伝子変異はその分子の機能発現に重要な部位で

はあるが、致命的とはならない程度の微妙な変異であることを示唆すると思われる。したがって病因となる遺伝子異常にはその分子が生理機能を発現するメカニズムそしてその中から新しい治療法を開発する情報が隠されているといえよう。さらにHCMではこれまでに10種以上の遺伝子に200以上の多数の変異が発見されており、中には発端者に初めて発生したde novo変異も稀ではないことが明らかにされている。し

たがって遺伝子の突然変異は日常的に頻繁に発生している現象と思われ、これも新しい環境に適応し進化し続けるための生命の神秘の1つであろう。



事務通信Vol.1

博士課程在学期間延長者の皆様へ 学生証の交付について

平成18年度に在学期間延長を行った4年次学生を対象に、学生証の再交付を行います。4月下旬には新しい学生証が発行される予定です。お渡しできるようになりましたら別途ご連絡いたします。

後期入学試験結果

2月21日に行われた後期入学試験の結果は下記のとおりとなっております。

	志願者数	受験者数	合格者数
修士課程	13名	13名	13名
博士課程	17名	17名	17名

また、医学研究科の総人員は以下の通りです。

平成18年4月1日現在

	1年	2年	3年	4年	合計
修士課程医科学専攻	21名	24名	/	/	45名
博士課程生理系	1名	6名	1名	3名	11名
博士課程病理系	2名	1名	3名	5名	11名
博士課程社会医学系	7名	5名	4名	4名	20名
博士課程個別最適医療系	15名	23名	14名	43名	95名

ティールーム



平成18年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の概要と今後

さる平成18年2月24日（金）に西日本の国公立大学の大学院教務担当者（教員・事務）多数が参加し、文部科学省主催で「平成18年度魅力ある大学院教育イニシアティブ」説明会が大阪府大阪市において開催された。今回はこの説明会を踏まえ、「魅力ある大学院教育イニシアティブ（以下、本事業と略）」について若干説明を加えたい。

この説明に入る前に、前回の大学院ニュースレターにも掲載したが、中央教育審議会から「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—」という答申が出された（平成17年9月）ことにふれたい。この答申はわが国の国際協力のさらなる増強と科学技術創造立国実現のために、大学院教育が担う役割を具体的な指針として答申されたものである（詳細は前号参照）。今回の本事業はその具現化といつてよい。

ところで、本事業の目的だが、「若手研究者に新たに求められる資質、自立して研究活動を行うための能力を組織的かつ体系的に修得させるための教育プログラムを支援し、大学院の研究者養成機能の強化を目的（教育学術新聞より抜粋）」とされている。実際、今回の本事業の説明会においても、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室室長の挨拶の中で「**大学院教育の実質化が急務**」と訴えた。即ち「**実質化＝大学院教育を単に指導教員のみならず組織的に教育する環境を整備すること**」で、本事業はそれを促進する手段といつてよい。

また、本事業の公募対象は「医療系」を含む3分野で、事業規模も年間最高1億円（半額補助）で2年間の取組期間（但し事業の継続は必須）と、まさしく本学の大学院教育を活性化する方法としてこれを活用することが必要だと思慮される。

さらに、採択の視点として「今後の研究者養成に関する取組計画の実現性（将来性）」を審査することとして、特に次の3つについてどのように実践されるかを確認される。

- ① 現代社会の新たなニーズに応えられる体系的な教育課程の編成
- ② 教育研究活動の活性化
- ③ 教員による研究指導方法

このように、本事業は取り組み次第で大学院教育を活性化できる事業であるが、そのためには学内のコンセンサスを統一させ、本事業の目的に沿う教育プログラムの開発が必要である。幸い本研究科にはその下地はできており、今後の検討次第では平成19年度以降に実現できる可能性もある。また学内のコンセンサスを得るため、大学院版ファカルティディベロップメント（FD）もしくはワークショップ（WS）の開催も視野にいれ、研究科委員会を中心に検討していきたいと考えている。

（医学研究科 科長 赤 須 崇）

本事業に関する平成18年度版の情報は以下のホームページでも参照できます。

<http://www.jsps.go.jp> （日本学術振興会ホームページ）

事務通信Vol.2

平成17年度成績報告並びに平成18年度履修登録について

博士課程・修士課程在籍学生の皆様を対象に、平成17年度の履修結果ならびに成績報告書を4月上旬に配布する予定です。併せて、各自の履修状況を踏まえ、平成18年度に履修する科目を決定していただき、履修登録を行うための「平成18年度履修希望調査」を4月上旬に実施する予定です。書類が届きましたら、速やかに当該年度の履修登録科目を決定し、医学部事務部教務課までご提出下さい。

なお、併せて平成18年度カリキュラムブック・時間割・その他必要書類等を配布する予定です。こちらも必ず眼を通してください。

ご存知ですか？履修単位の修了要件は以下の通りとなっています。

修士課程：30単位（但し、学群によって必修科目の設定あり）

博士課程：30単位（但し、専攻系により学修科目の設定あり）

この機会に必ずカリキュラムブックに目を通してください。



医療費補助の制度変更について

平成18年度から本学大学病院、同医療センターにおいて、本学大学院学生が受診した場合の医療費補助の方法が、「一旦窓口支払後の還付申請」方式に変更になっております。詳細は大学院カリキュラムブックに掲載しておりますので、必ずご確認ください。

なお、申請窓口は医学部事務部教務課で、診療月の翌月から受付を開始します。

編集後記

桜満開のなか入学式も行われ、いよいよ平成18年度がスタートしました。少し発行が遅れましたが、38号をお届けいたします。これからも紙面充実し、大学院医学研究科学生や教職員の皆様にとって、よりよい情報提供の場になるように心がけていきます。よろしく願いいたします。(俊)